

## ラオスの高機と腰機・細帯機

柳 悦 州

沖縄県立芸術大学附属研究所とラオス情報文化省文化研究所では「沖縄県立芸術大学附属研究所とラオス情報文化省文化研究所との間の学術協力に関する協定書」に基づき、1993年よりラオスの民族調査を継続している。

それに先だって筆者は、1991年よりラオスの織物調査を行ってきた。同国の織物については、沖縄の読谷山花織に似た技法であるラオスの最も特徴的な垂直紋綜統を使った緯浮き紋織り技術を附属研究所紀要で報告した（注1）。この織物は主にラオ族によって織られている。

この垂直紋綜統高機以外の機を使った織物もラオスには様々に存在することが研究を重ねる中から明らかとなってきた。本稿では、ラオス南部と北部に居住する少数民族が使用している腰機、細帯を織るための腰機と杵機、また、アカ族のテープ織りなどについて概略を報告する。

ラオスはインドシナ半島の内陸部に位置し、ラオ族が6割を占める多民族国家である。ラオスの人々は高地ラオ族（ラオ・トゥン）、低地ラオ族（ラオ・ルム）、山地ラオ族（ラオ・スン）と大別できる。この民族構成がラオスの文化を考える上での基本となる。

### 【高 機】

ラオスの最も一般的である手織機の構造は垂直紋綜統高機（図1）でラオ・ルムによって主に使用されている（注1）。その基本的な構造は以下のようなものである。2枚一組の平織り用の番目糸綜統は、機枠の上部から吊り紐で下げられている。この綜統は踏み木（竹）によって交互に開口運動する。布巻き棒は、その片方の端に直角に2本の穴が開けられ、機に固定された垂直な棒に通すことで固定される（図2）。

平整経式の経糸は機の先端から上に折れ、機の上部を通り織り手の頭上で機の

横木にしばられ固定される。経糸は機の先端部分までは織り幅を保っているが、そこから織り手頭上の固定部に向かって徐々に幅が狭められ、固定部分では糸束状になって結ばれている。経糸の張力はこの結び目によって調整される。

このタイプの高機は主に低地ラオ族（ラオ・ルム）によって使われているが、経糸が経巻き用の板に巻き取られるもの（1996年2月 Pakse で調査，ラオ族），通常垂直紋綜統は織り手側にあり，織り手自身が操作するが，その位置が機の先端部分に位置し，織り手とは別の補助者が紋綜統を操作するもの（1994年12月 Shengkho で調査，黒タイ族，注2），垂直紋綜統が備わらず，直接経糸を針状の道具ですくって紋織りするもの（1994年12月 Shengkho で調査，黒タイ族），紋を織り出す多数の細棒が直接経糸に挿入されているもの（1998年3月 Sam Teu で調査，タイオー族），沖縄の花綜統のように模様用の紋綜統が多数備わるもの（1997年3月 Vientiane 南部で調査，ラオ族），経糸が二重になっているもの（1993年12月 Sheng Luang で調査，タイカウ族，注3）など，地域や民族・用途によってかなりのバリエーションを調査してきた。

またラオス北部のランテンヤオ族の高機では，図3のように経巻き具が備わった高機を使っており，雲南省緑春県のタイ族とは構造的に類似しているものであった。ラオスの典型的な高機と比較すると，箴づかの形態，経巻き具が備わること，天秤を使った綜統の開口方式であることなど，相違点が多い。

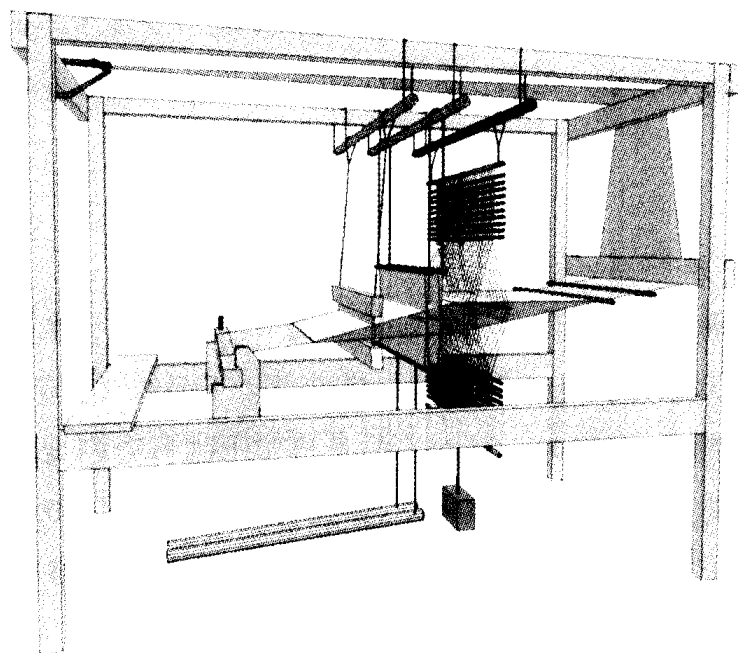


図1 ラオスの垂直紋綜統高機

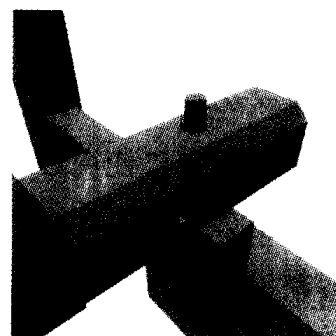


図2 布巻き棒固定部

また、ラオス東部の Shengkho（黒タイ族）や北部 Luang Nam Tha（カムルー族）では、図4のように織り手が座る部分と布巻き棒固定部分だけが機の構造をした高機があった。4本の杭を地面に打ち、前後の杭をそれぞれ連結して座板を乗せる。織り手の前側の左右2本の杭は長く、布巻き棒を固定してある。開口装置や経糸折り返し部分、経糸固定部分は高床式住居床下の梁などに固定した竹を使用していた。図1のように、設置した場所を動かすことのできる独立した枠構造の機に対し、図4の4本の杭による機は、ラオス式高機のもっとも簡単な構造であり、その成立について注目する必要がある。経糸の張力の調整は、図2のような布巻き棒の構造では細かにできない。経糸の先端部分を織り手側に持つてくることで、織る位置で張力の調整を微妙に行える利点がある。枠構造の高機（図1）の場合には、経糸が機枠の外側を回ることによって、機のゆがみや振動を防ぐ役割も果たしている。更に、同じ村では腰機も同時に使われていた点も興味深い（後出）。



図3 ランテンヤオ族の高機

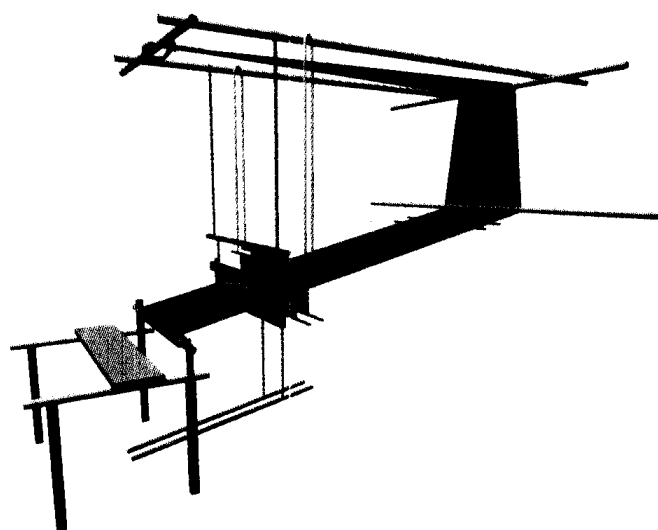


図4 座る部分と布巻き棒固定構造だけの高機

### 【腰 機】

#### ○モン・クメール族の腰機

モン・クメール族のうち、タオイ族、ラフ族、タリアン族などがラオス南部に集中して居住している。村は中央の広場を円形に取り囲むように高床式の家が位置していることに特徴がある。住居は数家族が共同で住むいわゆるロングハウス

形式である。広場に面した入り口のテラスは神聖な領域として、柱や破風等にレリーフや彩色が施され、また牛の頭骨なども飾られており、ラオ族の村とは異なった独特の雰囲気があった。

ラオス南部のタリアン族では足裏と腰で経糸を支える腰機（図5）が使われていた（1996年3月 Saravan で調査）。中筒開口時には足首を伸ばして経糸張力を増し、綜統開口時には足首を大きく曲げて張力を弱め逆開口させる。

輪状整経式で広幅の紋織であることも特徴的である。足裏で支える2本の棒に経糸を巻き取ってあり、腰で支える布巻き棒にも織り上がった布を巻き込んである。この形式の腰機は、インドネシアや海南島、台湾等東南アジア島嶼地域に分布しているが、ラオスにも分布していることは、その広がりインドシナ半島内陸部にも及んでいることとなる。



図5 タリアン族の腰機



図6 カムールー族の腰機



図7 カムールー族の織り手

## ○カム一族の腰機

同じモン・クメール族であるカム一族は、ラオス中北部に居住している。北部 Luang Nam Tha 近郊のカム一族 Houei Ou 村では図 6, 7 のような腰機を調査した。

輪状整経式腰機であるが、南部の腰機（図 5）とは形態的に大きく異なっている。織り手は腰に布巻き棒を固定している。織り上がった布はその棒で Uターンをして経糸の下側を機の先端方向に向かっている。機の全長は約 10m 前後と長く、経糸が巻き込まれずに全部が張り伸ばされている。先端部分は高床式住居の柱や床下の周囲を囲っている竹の柵に固定する。経糸が長く張られているため南部の腰機のように、開口と逆開口時に腰によって張力の調整を大きくする必要がない。

4本の杭で構成された簡単な高機（図 4）の説明を前述したが、その高機と、この腰機が同じ村で同時に使われていた。高機と腰機では開口方法（2枚の番目綜統か中筒・輪状綜統）・整経方式（平整経式か輪状整経式）・張力保持方法（固定か腰で支持）と基本的な構造は異なっている。最も簡単な高機と腰機が、経糸を長く伸ばした共通の形態で同時に使われているという状況は、タイ・ラオ族に対してインドシナ半島の先住民であるカム一族などの腰機が、雲南省から東南アジア北部地域にかけてのこの地域で、ラオ族の高機へと変化していった可能性も考えることができ大変興味深い。

腰機から高機への移行が、インドシナ半島北部でも行われたと考えると、図 4 の構造のような布巻き棒の固定が起こり、また住居の床下を利用することで、足踏み開口を行うことができるようになった。更に、経糸を Uターンさせて頭上で固定することによって、張力の調整が容易になったと考えることができよう。

従来、タイ・ラオスで使われている高機は言語や文字、宗教や様々な文化とともにインドから伝来したとされていた（注 3）。このカム一族の腰機、アカ族の高機（2枚の綜統を備え 4本の竹を立てた簡単な枠構造をしている）やカム一族の高機など、ラオス北部から雲南省にかけての多くの民族の機との関係を考慮し、インド伝來說について再考する必要もあろう。

### ○モン族の腰機

モン族は天秤腰機によって麻布を織っている(1994年12月 Sam Neua 県で調査)。図8のように2本の柱の間に経巻き具、天秤開口装置を備えた腰機である。織り手は別の椅子に腰掛けて織り作業を行うため、機の横部材は必要ない。雲南省の定住している苗族(ラオスでのモン族)では機枠のある天秤腰機や高機が使われているが、移住をする民族としてのラオスでのモン族は、簡単に持ち運ぶことができる2本の柱で構成された機を使っていることに特徴がある。

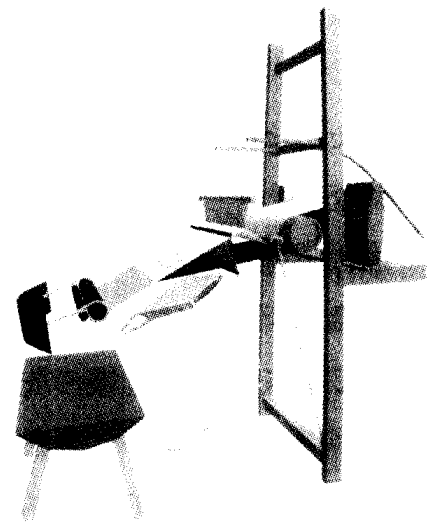


図8 モン族の天秤腰機

日本・沖縄まで広く分布している天秤腰機の横の構造材を取り去ると、このモン族の天秤腰機構造となることも共通点として注目すべきである。

### 【細帯機】

高機や腰機では、おおむね布幅40cm以上の衣服用の生地として、ある一定量の布地を織り上げるために、織り技術を工夫し積み重ねてきた。これとは別に細幅の布や帯・テープなどは、織り上げるまでの所用時間も少なく、様々なバリエーションが織機や織り技法にある。

### ○黒タイ族の細幅織物

ラオス東北部 Shengkho 村の黒タイ族では、民族衣装である上着の衿やチューブスカートのウエスト布など厚地で幅が狭い布を、図9のような状況で高機を使い織っていた(注2)。並幅用の高機に幅を狭く経糸を準備し、箆を使わずにヘラで緯糸の打ち込みを行っていた。織り手は、機の正面に座らずに、経糸の横に位置することが大きな特徴で



図9 黒タイ族の細幅織物

ある。織り進む速度が速いため、織る位置が変えやすいこの方法がとられたのであろう。箴を使わないことから、経糸密度が増し地厚な織物となる。

### ○ラオ族の細帯機

ラオス中部 Savannakhet では、ラオ族の細帯織りを調査した（1996年調査、図10）。この細帯は寺院に寄進するための織物であり、沖縄の石川メンサーやグーシバナのように一本おきに色の異なった経糸を準備する。開口装置はなく、竹ヒゴを準備し緯糸を入れる前にあらかじめ竹ヒゴで経糸をすくって紋様を準備しておく。そのヒゴを案内として緯糸を入れて織り進む。この事例でも、織り手は経糸に対し斜め横に位置して織り進む。緯糸の打ち込みは黒タイ族と同様にヘラ状の道具を使用していた。

### ○モン・クメール族の細帯機

ラオス南部タオイ族の細帯機（1996年2月 Muang Lamam で調査、図11）は、経糸の幅を保持するための幅だし棒が備わっていた。すなわち細棒に一本一本の経糸が一周ずつ巻き付けられて幅出しと経糸を整える役目を行っている。使われている道具の幅が広いので、同じ方法で広幅の布も織ると考えられる。



図10 ラオ族の細帯織物



図11 タオイ族の細帯機

### ○ラオス北部の細帯機

図12のような編み袋がラオス北部では日常的に小物入れとして多用されている。よく観察すると袋本体は編み物であるがベルトは織物であり、ベルトと袋の接合

部分は両端とも経糸がループ状に折り返されていることが解った（図13）。長いテープ状の織物を織って必要な長さに切って使うのではなく、袋に必要な細帯をあらかじめ、その長さ分だけ整経し織ったものであることを示している。

このような織物はどのような方法で織られるのであろうか。袋の編み方についての報告は雲南省のものがある（注5）が、この細帯の作り方については、まだ報告がなされていない。

ラオス北部のカム一族などで、この細帯を織る杵機と腰機について調査することができた。

杵機（Sila 村、カム一族 Sila 人、1998年12月調査、図14）では、長さ150cmほどの2本の棒を立てかけ、2本の細い横棒を細帯の長さに相当する位置に挿入する。平整経をその細棒を使って行い、そのまま簡単な綜統を作り、直接織り作業を行う。

一方腰機（カム一族、SaoSii 村、1998年12月調査）では、まず地面に細い棒で杭を打ち整経（図15）を行う。次に、その細棒を腰機の手前と先の棒として、腰と柵などに固定する。経糸に輪状綜統をかけた後、織り作業を行う。（図16）。



図12 網と織りによる袋

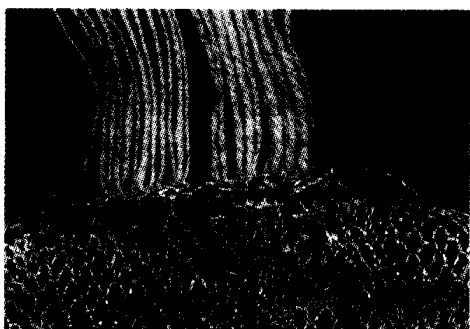


図13 袋のテープ接合部分

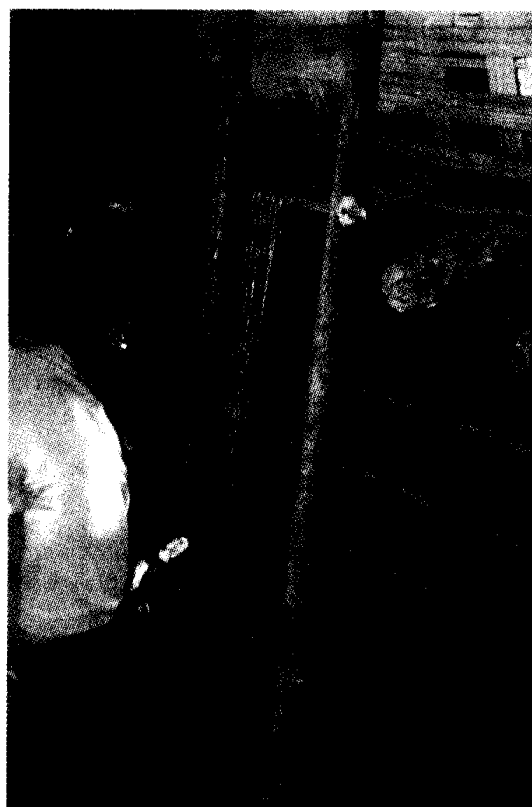


図14 Sila 人の細帯織り



同じ細帯を織るのに杵機と腰機という二つの方法があり、いとも簡単に細帯を準備し織っていく様子は驚きだった。

村の中や農作業の行き帰りに歩きながら袋を編む光景は北部の村々ではごく一般的な光景である。細帯はほぼ1時間ほどで織りあがってしまい、なかなか見ることができないが、このような2つの方法で広く一般的に行われていると考えられる。

### ○アカ族の細帯機

アカ族の DaetMay 村 (Muang Sing で1998年12月調査) では、全長60センチほどの竹を使った細帯機 (図17, 18) を調査した。アカ族はコインが一面に縫いつけられた帽子をかぶっているが、その素材の一部にビーズが織り込まれた幅1センチあまりのテープ状の織物がある。竹を弓状にしならせてその間に4本の経糸を張る。両側の経糸は細く、ビーズがあらかじめ沢山入れられている。中央



図15 細帯の整経

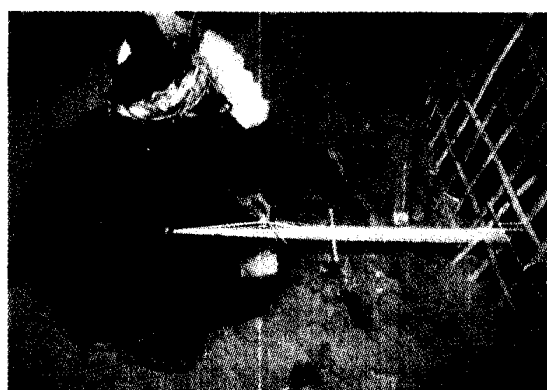


図16 カム一族の細帯織り腰機

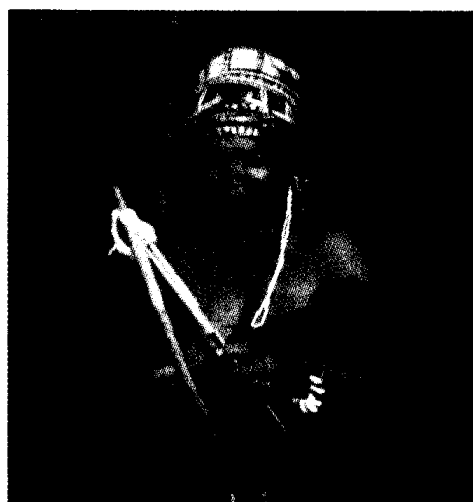


図17 アカ族の細帯弓機

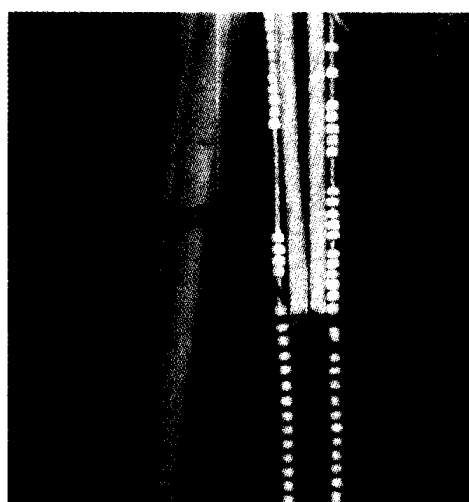


図18 アカ族の細帯弓機部分

の2本の経糸は太い。開口装置はなく、弓で張力を与えられた経糸に束ねた緯糸を指でくぐらせて織り進む。両端の経糸に緯糸を一本織り込んだ後、ビーズの厚さが約3ミリあるため、その間は中央の2本の経糸に緯糸を織り込み、ビーズの厚さ分織り進んだ時点で、両端の経糸にまた緯糸をかけて織り進んでいく。

経糸の本数が最少の2本あるいは4本と非常に少なく、開口装置もない。しかし弓で張力を付加し経糸と緯糸が直交し組織されることを考えると、最も単純な構造を有した織機である。このような事例はアカ族では今までに報告されておらず、この報告が始めてである。

### 【まとめ】

ラオスの高機と腰機、細帯機について概略をまとめた。ラオスにおける高機のたくさんのバリエーションと同様に、腰機や細帯用の機についても様々な種類の機が使われていることがわかった。民族によっても、また同じ民族であっても異なった方法で織物が織られていることも確認できた。

3種類の腰機（モン・クメール族、カム一族、モン族）がインドシナ半島内陸部で織り続けられていること。特にモン・クメール族とカム一族はタイ・ラオ族に対して先住民族であり、ラオ族の高機より古い機の様相を伝えていると考えられる。そのカム一族には、4本の杭を打った簡単な高機や経糸を長く伸ばした状態の腰機など、腰機から高機へ移行したと考える際に参考となる興味深い事例を見出すことができた。

また、細帯機（ラオ族、Sila人、カム一族、アカ族）は今までに報告例がなく、これからの研究課題といえる。

### 注

注1 柳 悦州「ラオス染織予備調査報告」『沖縄芸術の科学』第5号, p.25-42, 1992, 沖縄県立芸術大学附属研究所.

注2 柳 悦州「ラオス シェンコー地域織物調査報告」『沖縄芸術の科学』第8号, p.57-73, 1995, 沖縄県立芸術大学附属研究所.

注3 柳 悦州「ラオス シェンルアン村の織物調査報告」『沖縄芸術の科学』第7号, p.91-106, 1994, 沖縄県立芸術大学附属研究所.

注4 前田 亮『手織機の研究』, p. 119, 1992, 京都書院.

注5 渡部順子「民具抄録 (V)・雲南の編み袋」『雲南の生活と技術』, p.347-357, 1994, 慶友社.